

第 1 章

概

要

『北に一星あり（第4集）』と題する本報告書は、平成9年度の自己評価委員会の活動をまとめたものである。

今年度の自己評価委員会では「学生による授業評価」を主要な検討課題として取り上げた。この課題は前年度から引き継がれたものである。当委員会の任務は、本来、①自己点検・評価を必要とする項目を明らかにし、②それを当該実施主体に検討依頼し、③検討結果を分析する、という点にある。このような手続きからすると、今年度の委員会活動はやや変則的といえるかもしれない。他の実施主体に検討を依頼するのではなく、当委員会自身が検討課題と取り組んだからである。

「学生による授業評価」の問題は教務委員会と関連する内容であり、同委員会に検討依頼することも考えられた。しかし、まったく新しい試みであり、自己評価委員会が自らの責任において検討することが望ましいと判断された。当委員会ではまず、「学生による授業評価」の意義または目的に関する議論から始めた。意義または目的といった基本点が明らかにされなければ、具体的な作業を進められないからである。その結果、「授業の改善」を唯一の目的とするアンケート調査という具体案が生まれたのである。

アンケート調査の内容を作成するに先立ち、7月には教官に対する実施状況の調査が行われた。その趣旨は、各教官が個人的にどの程度アンケートを実施しており、またどのような意見をもっているかを知ることであった。本報告書の第2章はその内容をまとめたものである。

学生に対する「授業改善のためのアンケート」は2つに大別される。ひとつは全学的な観点から回答してもらう内容であり、共通型と称している。もうひとつは特定の授業科目を対象としたアンケートであり、個別型と称している。個別型については、授業内容の違いにより、さらに講義科目用、語学科目用および実技・実習科目用の3つに分けられた。

共通型アンケートについては比較的簡単に合意が得られ、12月に全学的に実施された。その内容は本報告書の第3章でまとめられている。他方、個別型アンケートについては、さまざまな意見が提出され、しかも学科単位ですでに実施中のところもあり、全学的に実施することは困難とされた。そこで、本年度は自主的に実施することになった。個別型アンケートは1月下旬から2月上旬にかけて行われた。自主的な実施にもかかわらず、68名という多数の教官に参加していただいた。本報告書の第4章はこの内容をまとめたものである。

さらに、本報告書の第5章は学生委員会が平成9年12月にまとめた「学生生活に関する調査報告書」を再録したものである。この報告書においても、また「授業改善のためのアンケート」においても、学生からはさまざまな意見が寄せられた。それらのなかには有益な意見も少なくない。そうした意見に大学側は一つひとつ応えていく必要がある。そのことは授業の改善につながるだけでなく、学生に対するサービス全般の向上に役立つと思われる。